

3

次の文章は、島崎藤村しまざきとうぞんが書いた「二人の兄弟」という物語です。この物語は、「一 榎木の実えのき」、「二 釣の話つり」で構成されています。これを読んで、あとの問いに答えなさい。

## 二人の兄弟

島崎藤村

一 榎木(注1)の実

皆さんは榎木の実を拾ったことがありますか。あの実の落ちている木の下へ行ったことがありますか。あの香こうばしい木の実を集めたり食べたりして遊んだことがありますか。

そろそろあの榎木の実が落ちる時分でした。二人の兄弟はそれを拾うのを楽しみにして、まだあの実が青くて食べられない時分から、早くあか紅くなれ早く紅くなれと言って待っていました。

二人の兄弟の家には奉公(注2)して働いている正直ちかな好いお爺じいさんがありました。このお爺さんは山へも木を伐きりに行くし、島へも野菜をつくりに行って、何でもよく知っていました。

このお爺さんが兄弟の子供に申しました。

「まだ榎木の実は渋くて食べられません。もう少しお待ちなさい」とそう申しました。

弟は気の短い子供で、榎木の実の紅くなるのが待っていられませんでした。お爺さんが止めるのも聞かずに、馳出かけだして行きました。この子供が木の実を拾いに行きますと、高い枝の上(注3)にいた一羽のいっわ 榎鳥かじどりが大きな声を出しまして、

「早過ぎた。早過ぎた」と鳴きました。

気の短い弟は、枝えだに生なっているのを打ち落とすつもりで、石ころや棒を拾っては投げつけました。その度に、榎木の実が葉と一緒に

になって、パラパラパラ落ちて来ましたが、どれもこれも、まだ青くて食べられないのばかりでした。

そのうちに今度は兄の子供が出掛けて行きました。兄は弟と違って気長な子供でしたから「大丈夫、榎木の実はまだもう紅くなっている」と安心して、ゆっくり構えて出掛けて行きました。兄の子供が木の実を拾いに行きますと、高い枝の上にいた榎鳥がまた大きな声を出しまして、

「遅過ぎた。遅過ぎた」と鳴きました。

気長な兄は、しきりと木の下を探し廻りましたが、紅い榎木の実は一つも見つかりませんでした。この子供がゆっくり出掛けて行くうちに、木の下に落ちていたのを皆な他の子供に拾われてしまいました。

二人の兄弟がこの話をお爺さんにしたら、お爺さんがそう申しました。

「一人はあんまり早過ぎたし、一人はあんまり遅過ぎました。丁度好い時を知らなければ、好い榎木の実は拾われません。私がその丁度好い時を教えてあげます」と申しました。

ある朝、お爺さんが二人の子供に、「さあ、早く拾いにお出なさい、丁度好い時が来ました」と教えました。その朝は風が吹いて、榎木の枝が揺れるような日でした。二人の兄弟が急いで木の下へ行きますと、榎鳥が高い枝の上からそれを見えています。

「丁度好い。丁度好い」と鳴きました。

榎木の下には、紅い小さな球のような実が、そこにも、ここにも、一ぱい落ちこぼれていました。二人の兄弟は木の周囲を廻って、拾っても、拾っても、拾いきれないほど、それを集めて楽しみました。

榎鳥は首を傾げて、このありさまを見ていましたが、

「なんとこの榎木の下には好い実が落ちていきましょう。沢山お拾いなさい。序に、私も一つ御褒美を出しますから、それも拾って行って下さい」と言いながら青い斑の入った小さな羽を高い枝の上から落としてよこしました。

二人の兄弟は榎木の実ばかりでなく、榎鳥の美しい羽を拾い、おまけにその大きな榎木の下で、「丁度好い時」までも覚えて帰って来しました。

## 二 釣の話

ある日、お爺さんは、二人の兄弟に釣の道具を造ってけると言いました。

いかにお爺さんでも釣の道具は、むずかしからう、と二人の子供がそう思つて見ていました。この兄弟の家の周囲には釣竿一本売の店がありませんでしたから。

お爺さんは何処からか釣針を探して来ました。それから細い竹を切つて来まして、それで二本の釣竿を造りました。

「針と竿ができました。今度は糸の番です」とお爺さんは言つて、栗の木に住む栗虫から糸を取りました。丁度お蚕さまのように、その栗虫からも白い糸が取れるのです。お爺さんは栗虫から取れた糸を酢に浸けまして、それを長く引き延しました。その糸が日に乾いて堅くなる頃には、兄弟の子供の力で引いても切れないほど丈夫で立派なものができあがりました。

「さあ、釣の道具が揃いました」と言つて兄弟にくれました。

二人の子供はお爺さんが造つた釣竿を手に提げまして、大喜びで小川の方へ出掛けて行きました。小川の岸には胡桃の木の生えている場所がありました。兄弟は鰻のいそうな石の間を見立てまして、胡桃の木のかげに腰を掛けて釣りました。

半日ばかり、この二人の子供が小川の岸で遊んで家の方へ帰つて行きますと、丁度お爺さんも木を一ぱい背負つて山の方から帰つて来たところでした。

「釣れましたか」とお爺さんが聞きますと、兄弟の子供はがっかりしたように首を振りました。賢いお魚は一匹も二人の釣針に掛りませんでした。

その時、兄弟の子供はお爺さんに釣の話をしました。兄はゆっくり構えて釣つていたものですから釣針にさした餌は皆な鰻に食べられてしまいました。

弟はまたお魚の釣れるのが待遠しくて、ほんとに釣れるまで待つていられませんでした。つい水の中を掻廻すと、鰻は皆な驚いて石の下へ隠れてしまいました。

お爺さんは子供の釣の話の話を聞いて、正直な人の好きそうな声で笑いました。そして二人の兄弟にこう申しました。「一人はあんまり気が長過ぎたし、また、一人はあんまり気が短過ぎました。釣の道具ばかりでお魚は釣れません」

(島崎藤村「二人の兄弟」による。)

(注1) 榎木Ⅱアサ科の落葉樹。高い木に育つ。

(注2) 奉公Ⅱよその家に雇われて住み込みで働くこと。

(注3) 檀鳥Ⅱカラス科の鳥である「カケス」の別称。

(注4) 斑Ⅱまだら。ぶち。

(注5) お蚕さまⅡカイコガ科のガの幼虫の丁寧な言い方。まゆから絹糸をとる。

(注6) 鰯Ⅱカジカ科の魚。

一 「一 榎木の実」の~~~~線部が、物語の始めに示されていることによる効果を説明したものとして最も適切なものを、次の1から4までの中から一つ選びなさい。

- 1 語り手が読者に、榎木の実に関する経験を問うことによって、二人の兄弟の相互関係に関心をもたせる効果。
- 2 語り手が読者に、榎木の実に関する経験を問うことによって、榎木の実にまつわる物語に関心をもたせる効果。
- 3 語り手が読者に、兄弟や家族との関係を問うことによって、二人の兄弟の相互関係に関心をもたせる効果。
- 4 語り手が読者に、兄弟や家族との関係を問うことによって、榎木の実にまつわる物語に関心をもたせる効果。

二 — 線部①「二人の兄弟」は、この物語の中でどのような性格の人物として描かれていますか。「一 榎木の実」と「二 釣の話」を通して分かる性格を、それぞれ書きなさい。

三 — 線部②「しきりと」の意味として最も適切なものを、次の1から4までの中から一つ選びなさい。

- 1 寂しげに
- 2 改めて
- 3 何度も
- 4 注意深く

